

法学部の情報処理教育

今里, 滋
九州大学法学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6770638>

出版情報 : 情報処理教育広報. 14 (2), pp.1-3, 1991-12. 九州大学情報処理教育センター
バージョン :
権利関係 :



法学部の情報処理教育

今里 滋*

それにしても変わったものである。進歩というのか普及というのか、情報化の最後進国であったわが法学部にもあちこちパソコンが設置され、それも結構使われている。米国の判例データベースにアクセスして最新の企業買収関係の判例を分析したり、生年月日を基準にしての教官定員充足率のシミュレーションまで行われている。大学院の研究室でも、ワープロ専用機ではなくパソコンが主流を占め、狭いスペースにもかかわらず、足下や書棚にCPUやハードディスクが置いてあったりする。

およそ10年前、当時法学部助手の私は、博多区住吉にあった「あさひ屋」という古道具屋——今はおそろしくモダンな家電販売店になっている——からコモドールのPET2001(だったと思う)という中古のパソコンを買ってきた。3万円で、メインメモリは16KB、キーボードは幼児向け学習機のようなものであった。これを使ってBASICの勉強を始めた。ほどなくプログラミングの才能がないことに気づいた私はBASICは放り出してしまうのだが、しかしパソコンに対する畏敬(?)の念は捨てなかった。その頃、長大な博士論文を執筆していた私は、発売されたばかりの富士通のOASYSの実物を博多駅近くのショールームで見たとき、「こればい!これからはこれで論文書くとたい」と確信したからである。

だが、ワープロは車よりも高かったし、京大型カードを使って文献整理や抜き書きをしていた私はデータベース機能がどうしてもほしかった。だから、初めからワープロよりもパソコンと決めていた。ようやくPC9801が発売された。すぐ購入した。しかし、漢字ROMは付いていなかった。1年ほどしてオプションで7万円近いJIS第1水準だけの漢字ROMボードが発売されてから、「パソコン・ワープロ」が話題になり始めた。『アスキー』が何かに掲載されたワープロ・プログラムを必死で打ち込んだものの、まったく実用にならなかったことを憶えている。「マイレター」というワープロ・ソフトを大阪のソフトハウスが発売したときは、

* 法学部助教授



大阪の事務所まで見に行き、文節変換ではなかったものの、次々と漢字の熟語がディスプレイ上に表示されたときには「おお!」と感嘆の声を上げた。そのとき傍らにいたプログラマの満ち足りた表情を今も忘れない。だが、買えなかった。フロッピーディスク・ドライブがなかったからである。なかったというより高かった。節約に節約を重ねてようやく購入。8インチの巨大なやつで、50万円近かった。今でも私の研究室にある。それまではテープレコーダーにデータを溜めていた。若い諸君、信じられますか?

これでデータベースが使えるようになった。データベースでは「アイリス80」というのしかPC98では使えず、dBASEというのを理系の連中はIBMで使っているという噂が聞こえてくる程度だった。結構バグの多いソフトだったが——「アイリス」に限らず、当時のソフトはとにかくバグが多く、瞬時にデータがきえたり、暴走したりは日常茶飯事であった——、私はこれを使って文献データの入力を開始した。現在私が愛用するハードディスクに収まっている約1万件の文献情報はその頃からの蓄積である。

フロッピーディスク・ドライブが普及し始めてから、PC98用のソフトウェアが次々と市販されるようになる。「F/L邦文」というBASIC上で動くワープロ・ソフトで書き、16ドットのプリンターで打ち出した私の論文は、それだけで注目を集めた。そしてMS-DOSの登場。「松」、「一太郎」、「ロータス123」、「桐」。私のソフトウェア・ライブラリも着実に増えていった。8インチ・ディスクに収められたこれらの100枚近いソフトウェアは今では研究室のファイリング・キャビネットの一隅で静かに“余生”を送っている。

5インチのフロッピーディスクが出回ると、パソコンは爆発的に普及し始め、また、真に実用的なものになっていった。私は同僚や大学院生に、パソコンの効用とワープロ専用機を買うことの愚かしさを説いて回った。この“布教”の甲斐あってか、わが法学部には次第にパソコン“信者”が増えていくことになるのである。

「しかし」と思う。大学院や教官研究室にはたしかにパソコンとそのユーザーたちが増えた。だが、法学部の学生たちの間ではどうであろうか。豊かになったとはいえ、パソコンにまで手が回る学生はごく少数であろう。ワープロには触れたことがあっても、コンピュータは全然という学生がほとんどである。ところが、彼らは卒業と同時に情報化社会の最先端に投げ込まれていく。法学部卒業生

の95%は法曹にはならず、SEまがいの仕事をさせられる者の方が多い時代なのである。

もちろん、「西南学派」として伝統あるアカデミズムを誇ってきた九州大学法学部が専門学校みたいな授業をやれるか、という意見も強い。それはそれで正論である。しかし、情報処理の授業の受講生を募集すると、定員の3倍以上の250名もの希望者が殺到する現実をどう説明するのだろうか。受講生がわずか10名たらずという講義もいくつもあるのに…。

法律学は論理と手続きを重んじる学問である。緻密な論理が幾重にも寸分の隙もなく積み上げられた学説を読むと、まるで壮麗かつ細部にわたって精巧な建築物を眺めているようで、感動すら覚えることがある。論理と手続きを重視することは、実は、プログラミングも同じである。プログラミングは論理的思想と手続き優先の思想を養ってくれる絶好の教育機会である。昨年、Prologを使った論理プログラミングの授業をやって、まさにそうだとの確信を得た。プログラミングを中心とした情報処理教育は、法律学と情報化社会をつなぐ橋となり、学生たちを二つの世界に両棲し活躍できる人材へと導いてくれるであろう。浅学非才を顧みぬ孤軍奮闘の観があるが、trial and error を続けていきたい。